

公開シンポジウム『これからの医療を考える！—「患者図書室」／「患者情報室」のさらなる発展をめざして—』参加記

井上 智奈美

日時：2005年12月10日（土）13：00～17：00
場所：大阪市立大学医学部医学情報センター・
ホール あべのメディックスビル6F

基調報告では、「我が国の患者情報の現状と課題をめぐって」をテーマに、現在、市民・患者向けに患者図書室を設置している約60カ所の医療機関に対して行ったアンケート結果が報告されました。その結果、各施設に共通する課題は以下のとおりでした。

- わかりやすい場所への設置
- 施設内資料の充実、年間予算の確保
- 情報サービスに携わる人材の質の向上
- 院内各部署との連携
- インターネット利用の促進と情報コンテンツの充実
- 地域の公共図書館との連携
- ビデオ鑑賞会や小規模な勉強会の開催
- 資料提供だけでなく、やすらぎやくつろぎを感じられる場所づくり

事例報告では、東京女子医科大学「からだ情報館」、高知医療センター「なるほどライブラリ」、京都南病院「京都南病院図書室」の三題が報告されました。実際に活動している患者図書室からの運営状況の報告には、自らの業務の参考になると思われるものが2つありました。

1つめは、選書条件です。医学情報の提供という点からみて、選書条件は、大まかに次のようなものを基準とすると良いようです。

- 診療ガイドライン

• 医学的根拠のある、わかりやすい一般医学書
• 各患者会の情報や患者会が発行している冊子
2つめは、スタッフです。今回の報告で紹介された主なスタッフは、司書・医師・看護師・事務・ボランティアです。ボランティアの活用は、予算のない機関には心強い存在になりそうです。しかし、その際には、病院との連絡をとる「ボランティアコーディネーター」が必要とすることです。ボランティアだけでは図書委員会に参加できません。また、図書館業界の情報も入らないため質が低くなる可能性が高く、それらの改善やボランティア教育を行うスタッフとして、院内職員による連絡係が不可欠となるのです。

基調講演では、「これからの医療情報を考える」をテーマに、病院は「患者の生活の場」であるという考え方を紹介されました。欧米ではこれが一般的な考え方となっていると知り、日本との差を考えさせられました。

患者図書室は、患者のためのスペースであるとともに患者に情報を提供する場でもあります。病院が本当に患者中心に動いているのかどうかは、患者図書室の存在がどうあるかによって、その病院の「患者に対する姿勢」を語っていると考えられるそうです。

今回の主催者の中には、覆面患者（本当に癌患者の方です）として大阪府内の患者図書室をすべて訪問し、それぞれの対応状況から点数をつけて評価している方がいらっしゃり、患者図書室の実情を知るには良い機会となりました。開催関係者の皆さま、ありがとうございました。